

丸山 潤吉「山崎闇齋の政治理念」(東京大学出版会)

小熊本二「民主」と「愛国」(新曜社)

「パンツが見える。」は大いに刺激を受けた。私は著者の前著『愛の空間』から、思想史における皇居前広場の重要性に改めて開眼させられたが、今回も戦後、電車内で痴漢が現れるのはいつかという問題につき、ご教示を受けた気がしている。ひたすら資料を集めながら、「学界」の流行に背を向け、「興味本位」を自称してはばからない著者の姿勢は、分野こそ異なれ、いつも私に勇気を与えてくれる。

『山崎闇齋の政治理念』は力作である。丸山眞男の古典的著作に見られたような、闇齋学Ⅱ朱子学Ⅱ徳川体制の支配イデオロギ―という、いまなお根強い解釈を完全に覆し、闇齋は朱子の思想に忠実たらんとしたために、かえって徳川体制へのラディカルな批判者となり得たという大胆な解釈を提示している。この韓国人学者の孤独な研究を支え続けた「勉強会」の存在も称賛に値しよう。

『民主』と『愛国』には驚かされた。カエ

ルでいえば、「もう腹が裂ける」寸前の分量である。『単一民族神話の起源』から始まった独特の「微分法」は、ついに学問の「極北」と呼ぶべきところまで来てしまった。あとがきで著者は、研究の動機につき、「自分でもわからない」と言うが、私と同じ年(六二年)に生まれ、育った環境も似ているせいか、自分が生まれ落ちた一見平板なこの時代のルーツを探ろうとする鬼気迫る執念が感じられた。